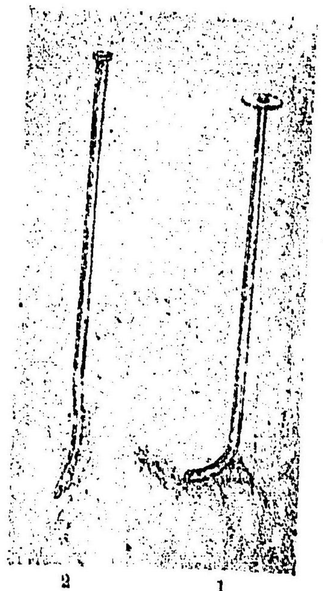
護謨製の彈力を有する卽ちチラトン氏カテーテル一個を具へ排尿に用ゆ

第百十六圖（五）

同



1 氣管カテーテル

2 チラトン氏尿道カテーテル

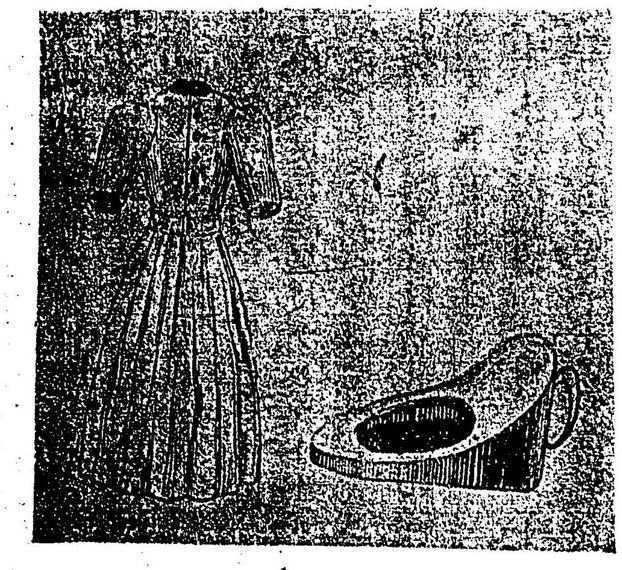
十一、便器、一個洗滌液を受くる爲め或は便を受くる爲に用ゆ

十二、聽診器、一個

十三、檢溫器（けんおんき）、母及び兒の體溫を測定するもの一個と、浴

聽診器は第八十三圖甲乙を見よ

第百十六圖（六）



同

1 便器

2 手術者着衣

用檢溫器と稱する浴湯の溫度を測るもの一個とを具ふ可し

十四、時計、一個

十五、氣管カテーテル、一個

兒の氣管內に存する汚物（おぶつ）を吸引（きゅういん）するに用ゆるものにして護謨製の彈力あるもの

を良こす場合に由てはヂラトン氏カテーテルの尖端を切りて代用する事を得

十六、臍帶結紮絲、絹絲、麻絲又は紐長さ一尺位のもの敷條、臍帶斷端の結紮に用ゆ

十七、臍帶剪刀、一個臍帶を切斷するに用ゆ

十八、沃度仿謨又はデルマトール、少量　臍帶の斷端並に外陰部の破裂創に撒布す

十九、消毒繃帶材料、卽ち綿紗脫脂綿多量、包臍繃帶數卷、丁字帶數枚

二十、小兒浣腸器、一個、通常二十瓦計りを容るゝ注射器狀のものにして小兒の浣腸をなすに用ゆ

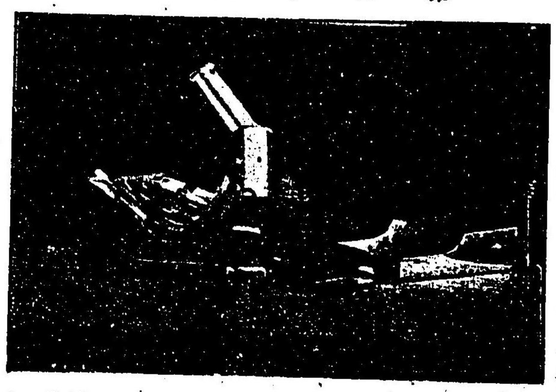
二十一、ホフマン氏液少量、及び一プロセント硝酸銀水少量

二十二、手術着、一枚　看護婦服に等しきものにして清潔なるものを撰ぶ

二十三、手拭、一筋

以上の器械は常に消毒し易き金屬製の箱に納め藥品繃帶材料等は常に缺乏せざる樣注意し買求め置き殊に藥品は其容器に其名を書きたる札を貼布し一定の場處に貯へ置き誤用せざる樣心懸け消毒したる器械繃帶材料等は消毒せざるものと混交せざる樣注意し消毒したるものを取扱ふには必ず消毒したる手指を以てし一度産褥熱の如き傳染性の病に用ひたる時は器械は勿論器械箱殘りの繃帶材料等悉く嚴重なる消毒を行ひ産家を去る時は器械藥品等の遺留なき樣取纏め持歸るべし

第百十七圖

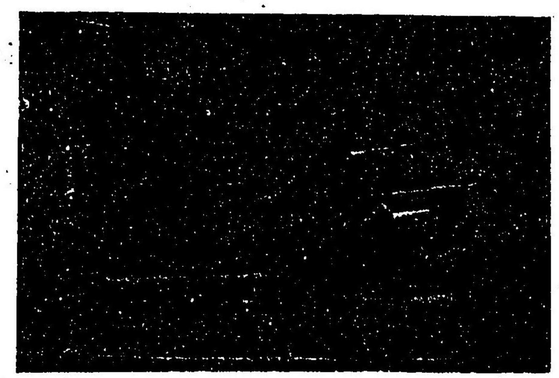


凡そ產婆携帶用器具は携帶するに便利にして完全なる消毒の出來得らるゝ者ならざる可らず故に著者は自己の考案に由て製作せしめ實用に供しつゝあり

著者考案產婆携帶器具(其一)

即ち圖に示すが如く上下の二層よりなれる金屬製の箱にして下層の箱中には護謨管及び嘴管を具ふる浣水器竝に五個の藥瓶及び液量計刷毛石鹼等を一の枠に挿みて篏め込み溶解石炭酸及びリゾールを容る可き藥瓶には度

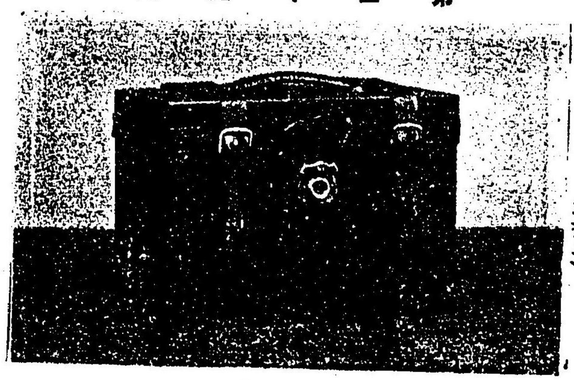
第百十八圖



目を刻み一々液量計を用ゆるの繁勞を省き浣水器中には綿紗罐を挿入す而して浣水器にも亦た度目を刻み盛るべき液量を知るに便にし綿紗罐は其まゝ消毒釜に投じて消毒し得らるゝ爲め上下の蓋を各二重とし螺旋に由て各二重間の間隔の伸縮を自由ならしめ之れに蒸汽の通ずべき數十個の小孔を設け二重の蓋の間に厚き綿を挿みて其小孔より塵埃其他の浸入を防ぐ

同　(其二)

第百十九圖



同（其三）

上層の箱中には臍帶剪刀、通常剪刀、爪鑢、金屬製尿道カテーテル、子ラトン氏尿道カテーテル、檢温器、浴用檢温器、氣管カテーテル、鑷子、浣腸用嘴管、膣洗滌用嘴管、倔利設林浣腸器各一個臍帶結紮絲一束をズック製のサックに挿みて納め尚ほ綿紗罐中の繃帶材料を補給せん爲め其材料と共に消毒し得らるゝズック製の袋一個を加ふ

而して上下二層の箱及び蓋は器械消毒鉢手洗盤に用ゆる爲め

各度目を刻みて盛りたる温湯及び藥液の量を知るに便あらしめ尚ほ箱の外側には組み立て得べき便器（膣の洗滌液を受け或は大小便を受く）を嵌め合せ一の皮製の箱に納め帶皮を以て結束するものにして其構造簡單にして消毒に便利なるのみならず容積張らず重量輕く能く片手を以て携帶し得るの便あり（現時大阪市東區平野町三丁目醫療器械商田中興三郎は此考案に基づき製作販賣しつゝあり）

第七十四節　産婦の診察法

産婆は産婦取扱上の方針を定めんが爲め診察に由て先づ分娩期を決定せざる可らず卽ち分娩既に開始せるか目下開口期なるか産出期あるやを知る事甚だ肝要なり而して此分娩期の鑑定は陣痛の模樣と子宮口の大小とに由て決定し得べしと雖ど

も多くの場合に於て破水は開口期の終りに生じ從て胎兒娩出の切迫を示すが故に産婆は産家に到着すると同時に必らず先づ既に破水せしや否やを尋問する事肝要なり而して既に破水後からば必要に應じて直ちに内診を行ひ

一、産道の模様殊に子宮口の大小及び其邊緣の狀態

二、胎兒先進部の何なるや如何になり居るや（矢狀縫合大小顱門の方向等）先進部殊に兒頭は何處まで下降せるや

三、臍帶上肢等の脫出はなきや否や

を詳にすべし

内診上兒頭と他部との鑑別

○頭蓋位置及び其鑑識法へ如何

即ち子宮口の大さは幾何指を挿入するに足るや壹錢銅貨大なるや貳錢銅貨大若くは直徑若千仙迷に開大せるや子宮口緣は既に消失せるや否や幾何の厚さを有するやを檢す可し但し子宮口緣の消失するは常に後方より始まり側方に及ぼし前方は最終迄存するものなり

先進部の何なるやを決定せんには既に破水後ならば指を以て直接之を觸れ破水前若くは子宮口未だ開大せざる時は膣穹窿部を隔てゝ之を觸るべし若し先進部が兒頭なる時は大にして硬き球狀物として觸れ縫合顱門を具へ破水後にありては毛髮を觸れ得べし

先進部は如何なる狀態にあるやを知らんには先進部頭蓋ある場合に於ては先づ其矢狀縫合を探り其方向母體骨盤の何れの

兒頭の各縫合の鑑別

内診に際し縫合を檢せんと欲せば必ず手指を縫合の方向と交叉せしめて觸診せざるべからず然らざれば明らかならず

大聽門の菱形は前頭縫合に移行の部は矢狀縫合に移行の部より鋭利なり

骨盤内に於ける先進部の位置を判定する法

徑線に一致するやを定めざる可らず然るに兒頭の縫合は皆なる事を決定する事困難なり然れども諸種の縫合中同じ硬度を有する二骨よりなるものは矢狀縫合と前頭縫合とのみにして他は異なりたる硬さの二骨よりなり加之矢狀縫合は諸他の縫合に比すれば最も長く其一端に小顖門ありて他端は大顖門に移り行き前頭縫合は之に反して甚だ短かく一端に大顖門ありと雖ども他端には鼻背を觸るべきが故に注意して檢する時は誤りなきに至るべし

二個の骨よりなれるが故に觸れ得たる縫合の確かに矢狀縫合

手指を以て耻骨縫際の上緣を觸れ得る時は兒頭は骨盤入口上にあり耻骨縫際の上緣を觸るゝ事能はざるも左右の座骨棘を觸れ得る時は骨盤廣部に存す若し兩者共に觸れ得ざれば兒頭

は骨盤狹部にあるを知り得べく是に由て兒頭の位置を定むべし但し後頭位に在りては兒頭の小斜徑を直徑となせる頭圍を以て産道を通過するが故に此頭圍の骨盤入口或は廣部或は狹部と一致する時を以て兒頭は骨盤入口又は廣部或は狹部にあるものと知るべし故に兒の頭圍骨盤の廣部に在る時は兒頭中の最も先進せる部分は已に骨盤狹部に達するものと知るべし分娩若し破水前なる時は姙婦診察法の條下に述べたるが如く順序を追ひ叮嚀に診察すべし殊に問診觸診に於て陣痛の模樣を知り且つ陣痛は何時頃より始まり其强弱及び間歇は如何胎兒の位置に異常なきや聽診に際しては胎兒心音に注意し内診を行はゞ上述せる檢査の外胎胞に注意すべし卽ち胎胞尙ほ存在するや否や胎胞内前羊水の多少（前羊水少なき時は卵膜は

兒頭に密接し爲めに胎胞の存否卽ち破水の有無を決定する事困難ある事あり）及び胎胞は陣痛間歇時こ雖ごも緊張するや否や等を檢すべし而して內外診は常に陣痛間歇時に於て行ふべく內診中陣痛起らば手指を其まゝにして少しも動かさゞるか或は靜かに少しく拔き出すを良とす

開口期の處置

○第一分娩期ニ於ケル產婆ノ處置ヲ記セ

○分娩ニ先ダチ浣腸スルハ何ノ爲メナルヤ其藥品及ビ分量ハ如何

第七十五節　正規分娩第一期に於ける取扱法

以上の診察法に由て姙娠は正規の終りを告げ既に分娩の始まれるを知り且つ何等の異常を認めず正規に經過すべきを察し得る時は產婆は其意見を產婦に通じ決して心配なきを告げ前きに便通の有無に關せず微溫湯或は石鹼水二三合（凡そ二合

○正規分娩處置ノ概要ヲ記セ

○正規分娩ノ取扱法

○正規分娩處置ノ要領

分娩第一期に於て產婦を臥せしむべき時機

の溫湯中に藥用石鹼末凡二匁を溶解したるもの）を以て浣腸を行ひ排尿せしむべし何となれば兩便の蓄積は屢々陣痛微弱を誘起すればあり而して產室及び產床を整へ必要の器具を漏れなく整頓し其後の經過を窺ふ可し

開口期の初めに在ては起立或は室內の步行など差支へなきにより產婦の意に任すべきも若し步行の際陣痛發作する時は靜かに坐せしむるか或は產床上に橫臥せしむべし而して陣痛漸々强烈となり疼痛益加はり子宮口既に貳錢銅貨大以上に開き胎胞既に子宮口に膨出するに至らば多くは同時に膣內より血液を混ずる粘液を漏出するものにして是れを機として產婦を產床に臥せしめ起坐を禁ず可し然らざれば胎胞は起立或は步行の際俄かに破裂し臍帶上肢下肢等の脫出を來すの恐れあり

懸垂腹とは妊娠子宮の著しく前屈せるものにして腹部嚢狀に懸垂せるものを云ふ詳細は後編妊娠異常を參照すべし

○妊婦ニ左側臥ヲ取ラシムベキ場合ヲ列記セヨ

又た平素虛弱なる婦人若くは疼痛甚だしきもの出血あるもの懸垂腹全身浮腫其他の疾病ある婦人は初めより産床に臥せしむるを良とす産婦既に臥床にあらば産婆は手指を消毒して外陰部の消毒を行ひ豫てより膣内分泌物の多量なりしものは五十倍石炭酸水を以て膣内洗滌を行ふ可し

臥位は正規分娩に在りては仰臥にて可なりと雖ども産婦若し側臥位を欲する時は必らず左の定則に從つて臥位を撰ぶ可し

即ち

先進せしめんと欲する部分の現存する側方を下にして臥さしむれば其部分の先進を容易ならしむ

即ち第一後頭位に在りては先進すべき後頭は母の左にあるを以て左側を下にして臥さしむべし之れに反して右側臥を取らしめば後頭は先進せずして分娩は遲延するのみならず前頭は反つて先進するに至るべし

産婆は陣痛の性質に注意し且つ四回乃至六回の陣痛毎に必ず一回づゝ聽診を行ひて胎兒の健否を確め開口期に於ける腹壓即ち努責は全く不用なるのみならず反つて早期に破水を來すの恐れあり且つ強て努責を營む時は産婦は早く疲勞を來し産出期に至て必要なる有力の努責を營む事能はざるに至るべきが故によく産婦を諭して全く之れを禁ず可し

開口期中は陣痛、胎兒心音其他に異常を認めざる限りは内診を行はざるを良とす何となれば内診は黴菌侵入の媒介たるのみならず子宮口緣を刺戟して疼痛を增さしめ或は陣痛の異常を誘ひ或は指尖を以て早期に胎胞を破るの恐れあればなり

前羊水の檢査

陣痛愈々强劇となり破水せば成る可く之れを清潔なる器に受け漏出せる羊水の多少と性質卽ち臭氣及び色に注意し直ちに手指を消毒して一回內診を行ひ前に述べたるが如く子宮口及び先進部の模樣及び他に異常なきやを檢す可し

要するに開口期に在りて未だ破水せざる間は母兒の危險を來す事稀れなるが故に其取扱ひ法も餘り複雜ならずして唯だ子宮口の全開大迄成るべく胎胞を保存するに勉むべし卽ち努責を禁じ安靜を守らしむる事甚だ必要にして分娩長引けばとて決して胎胞を破る事勿れ若し子宮口の全く開大せざるに當て人工的に胎胞を破らば反つて分娩遲延の恐れあるのみならず母兒兩體に大なる危害を招く事あるべし

且つ又た一般に開口期は他の二期に比して長時間を要し適當の注意を怠る時は種々の障碍を惹起すべきが故に細心の處置を要する事勿論なり卽ち體溫を測り脈搏を檢する事甚だ必要にして體溫攝氏三十八度以上に持續する時は猶豫なく醫師の來診を乞ひ其他母體の一般狀態に注意し飲食物に注意を與へ產婦疲勞を來せる時は少量の赤酒消化し易き食物殊に牛乳粥などを與へ清潔の飲料たとへば清水麥湯の如きものを（濃き茶咖啡等は良しからず）取らしめ陣痛微弱にして分娩長引かば時々臥位を變換し排尿は四五時間に一回の割にてなさしむべし

產婦の體溫は分娩に際して二三分昇るを常とすれども攝氏三十八度以上に昇ることなし

第七十六節　正規分娩第二期に於ける取扱法

産出期の處置

○分娩第二期ニ於ケル產婦ノ要務

腹壓を營ましむべき時期

子宮口は充分開大し胎胞破れ兒頭骨盤腔内に進入するに至れば產婆は少しも產婦の傍らを離るゝ事なく產婦をして仰臥位を取らしめ產婦若し側臥を望む時は既に述べたる定則に從がひて臥さしめ古來の習慣たる跪坐の如きは全く之れを禁じ常に陣痛の模樣に注意し五分時間毎に胎兒の心音を聽取し外診に由て未だ兒頭を觸れ得べきか或は既に會陰部の膨隆を來せるや否やに注意し陣痛益强劇となり體位體向等異常なく先進部は外診に由て觸るゝ事能はず深く膣内に下降するに至らば陣痛發作と共に產婦に努責を命じ陣痛止む時は同時に之れを止めしむ卽ち陣痛間歇時の努責は全く無益にして唯だ疲勞を增すのみなるが故に之れを禁ずるを要す

而して努責の際は產婦をして力をこめ呼吸を止め臥床端に結び附けたる手拭或は紐を握らしめ兩下肢を固定せしむべし而て產婆は兩手或は膝を以て產婦の腰部を壓し若くは支ふる時は產婦は充分の努責をなし得るものにして此際產婆も共に努責する時は產婦は大に力を得るものなり

產出期に在ても努責を禁ずべきもの

然れども身體虛弱なる婦人及び心臟病肺病等にて呼吸困難を訴ふるもの竝に脫腸脫肛等を患ふるものは陣痛時と雖ども努責を禁ぜざる可らず

便所に胎兒を產み落す事あるは全く產出期に便意を催すまゝに上圖するによる

兒頭深く膣内に下り會陰部を壓下するに至れば產婦は便意を催す事あり然れども多くは排便する事なきを以て別に意に留むるの必要なく是れが爲めに起坐を許し或は便所に至らしむる等の事あるべからず若し實際大便を排泄する事あらば臀下に便器を挿入して之れを受くべし

○會陰ノ保護ハ何故ニスルヤ

兒頭發露するに當つては會陰及び外陰部は緊張の極度に達し此際兒頭の通過急速なるか或は頭蓋の周圍徑大なる時は會陰は延長の遑なくして遂に大なる破裂を來すべし故に産婆は必らず之れを防ぐ方法を講ぜざる可らず之れを會陰保護法と稱す

會陰保護を行ふべき時期

○初産婦ト經産婦ニ於ケル會陰保護ノ異如何

會陰保護法

會陰保護法は産出期に於ける主なる處置にして之れを施すの時期は一般に兒頭が今や發露せんとする時より少しく以前を可とすべし而して會陰保護をなさんには臥位選定消毒等の準備に數分を要するが故に經産婦に在りては排臨の時頃より準備にかゝり初産婦に在りては會陰の延長に時を要するが故に

會陰保護の種類

○會陰保護ノ法ハ如何

○會陰保護術ノ方法及ビ目的ヲ記セヨ

努責せしめざる爲め産婦の口を開き淺き呼吸を營ましむべし

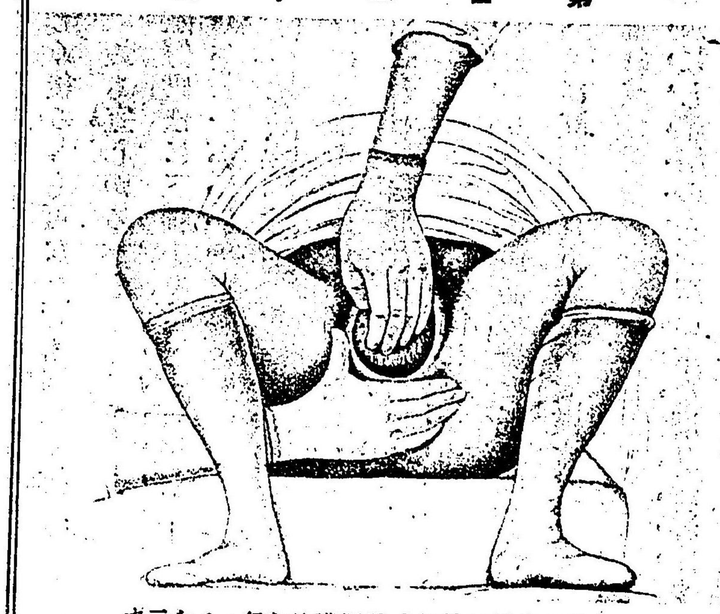
努責すべき爲めに握れる紐手拭等は此際放たしむべし

少しく後るゝも可なれども同じく排臨の時頃より準備にかゝらば最も宜しかるべし

會陰保護法に二種あり　一、仰臥位に於てするもの　二、側臥位に於てするもの是れなり

仰臥位會陰保護法、産婦を仰臥せしめ臀下に枕を挿入するか或は臀部を臥床の末端に來らしめ兩脚を開き股關節膝關節を屈せしめ外陰部及び産婆自己の手を消毒したる後ち産婆は産婦の顔に向つて其右側に坐を占め先づ産婦を諭して全く努責を禁ずるか或は産婆の命令通り努責を加減する樣諭し置き會陰及び肛門には五十倍石炭酸水又は百倍リゾール水に浸せる綿紗或は殺菌綿紗數枚を重ねて抵て右手を擴げて手掌を平らかにし産婦の右大腿の下を潛り綿紗上より會陰に壓抵し手

第百二十圖



仰臥の位置に於て會陰保護法を行へるを示す

根部を會陰に指尖を尾骶骨に向はしむるか或は（斯くせば早く手指の疲勞を來すべきが故に）拇指を右の大陰唇に他の四指を竝列して横に會陰に壓抵するも可あ

り此際陰唇繋帶の部を見能はざれば會陰の延長の度を知り能はざるが故に綿紗及び手掌は常に少しく之れを隔てゝ抵つべし卽ち會陰の前緣を距る事約二三分なるを良とす次で左手を腹壁上より兩脚間に送り拇指と他の四指にて兒頭を支持し兒の後頭結節全く耻骨弓下に現はれたる時は右手を以て陣痛時に兒頭を耻骨弓の前方に向て壓しつゝ會陰の强き膨隆を防ぎ左手の四指を以て兒頭を支へつゝ徐々に骨盤誘導線の方向に回轉せしむ而して陰唇繋帶は兒頭の陰門を去るに從つて次第に後方に退くが故に産婆は始終目を放たず之れに注意し手掌を陰唇繋帶より弛めずその後方に退くに伴ふて後方に送るべし

側臥位會陰保護法、仰臥の位置に於てするものと同じく先

第四十一圖

（産婦の位置に於ける會陰保護法）

づ産婆の手指を消毒し産婦をして兒の後頭の存ずる側方に臥せしめ腹壓を禁じ股膝兩關節を屈め殊に上の方にあれる下肢の股關節を強く屈せしめ産婆は其背側に坐を占め産婦の兩脚間には大なる枕を挿みて肛門及び會陰上に消毒藥に浸せる綿紗を抵て産婆は一手の指を伸ばして（左側臥に在ては右手右側臥に在ては左手）拇指を一側の陰唇に他の四指は揃へて他側に抵て陰唇繫帶は明らかに見得る樣にかし他手を腹壁上より兩脚間に送りて兒頭を支へ陣痛發作する時は會陰の手を以て兒頭を耻骨弓より前方に向つて壓し他手を以て兒頭を支へつゝ骨盤誘導線の方向に回轉せしむる事前者に於けるが如し此法は産婦が努責を忍び易きと會陰部の視易きとの便あるを以て殊に初産婦に適用せらる

會陰保護法を行ふに當つては常に左の三點を注意するを要す

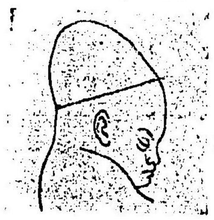
一、兒頭をして徐々に娩出せしむる事

兒頭發露せんとする時は腹壓を禁じ單に陣痛のみに由て娩出せしむる樣すべし然れども不隨意に努責し若くは陣痛甚だしく强劇なる時は會陰上及び直接兒頭に抵てたる手を以て兒頭を輕く支ゆるも可なり

二、出來得る丈け最小頭圍を以て娩出せしむる事

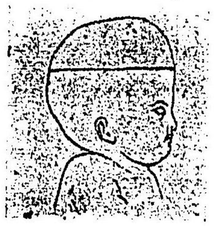
胎兒の各位置に於て陰門を通過するの際取る可き頭圍は一定せり例之ば後頭位にありては小斜徑を直徑とせる頭圍を以てし後頭結節耻骨弓下に止まり前頭顱頂等は會陰を通過

第百二十二圖



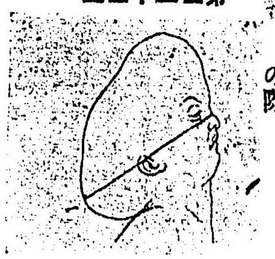
後頭位に於ける分娩の際、執るべき先進部の周圍を示す

第百二十三圖



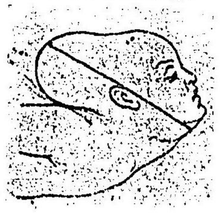
同　前頭位に於けるの際

第百二十四圖



同　額位に於けるの際

第百二十五圖



同　顏面位に於けるの際

すべし而して後頭結節が耻骨弓下に至らざるか或は之より遙かに後頸部にまで娩出したる時に於ては頭圍は反つて大となるべし故に產婆は各位置に於て耻骨弓下に來るべき部分を能く記憶せざれば會陰の破裂を豫防し難し

○産婆ガ後會陰壓出法ヲ行フベキ場合ヲ記セ

後會陰壓抵法一名壓出法

三、會陰支持の時を選ぶ事

會陰膨隆せばとて直ちに之れを支持せざるも可あり而して會陰支持は通常兒頭發露の直前より始め初めは輕く支持し耻骨弓下に來るべき部分全く此部に來らば初めて力を加へ會陰を支持す可し

兒頭深く膣内に下り強く會陰を膨隆せしめ肛門と尾骶骨との中間に於ける軟部の上より容易に兒の頭部を觸知し得るに至るも産出せざるか或は兒の心音緩徐不正となり或は羊水中に胎屎を混ずる等危險の徵候を發する事あらば産婦に仰臥位をとらしめ一手を以て兒頭を支へ他手の四指を竝列して其尖端を後會陰部に壓抵し陣痛間歇時に於て之れを前上方に壓し兒頭をして徐々に陰門を滑り出さしむべし之れを後會陰壓抵法

第百二十六圖

後會陰壓出法を行へるを示す

又は壓出法と云ふ此法を行ふ時は會陰の破裂を來す事少なしと雖ども毎常之れを行はざるを良とす

兒頭陰門外に娩出したればとて産婆は會陰の手を放つ

兒頭の第四回轉を助く

○臍帶ノ纏絡ニ就テ記セ

べからず卽ち次で肩胛部の産出するに當つて同じく保護法を行ふの必要あるが故に會陰に貼せる手は其儘さし他の手を以て兒の顏面を側方に向け試み（第一後頭位に在ては母の右の大腿內面に第二後頭位に在ては左の大腿內面に）顏面口圍に附着する血液粘液等を綿紗にて拭ひ且つ指頭に綿紗を或は綿花を卷きて兒の口內の汚物を悉く除去すべし何となれば兒頭産出するや多くは直ちに呼吸を始むるが故に之れを吸引するの恐あればなり次で手早く頸部に臍帶の纏絡する事あるや否やを檢し若し纏絡あらば少しく其一端を引きて是れを弛め後頭より顏面を越へて滑脫せしむるか或は弛緩せしめたるまゝ肩胛の産出を待て兒體を滑脫せしむ然れども臍帶若し强く緊張して之れを弛むる事能はざるか（然る時は牽引の爲めに臍

○頸部ニ臍帶纏絡セルモノヽ障害及ビ處置

帶の斷裂などを來すの恐れあり）或は兒の顏面藍紫色を呈して危險の徵ある時は臍帶結紮絲を以て二個の結紮を行ひ臍帶剪刀を以て其中央を切斷すべし

第百二十七圖

臍帶の頸部に纏絡せるを離解するの圖

若し尙ほ危急の場合に於ては臍帶の一部を産婆の手指にて堅く摘み是より凡三仙迷を隔てゝ助手に堅く摘まし出血を豫防し置き其中央を切斷し兒の娩出後に於て結紮するも可あり此際産婆が止血鑷子を處持する時は臍帶の兩端を狹むに甚だ便利あり

兒頭産出後次ぎの陣痛を待ち若し間歇時長く肩胛産出せざる時は子宮底を輪狀に摩擦して其收縮を促がし陣痛發作と共に

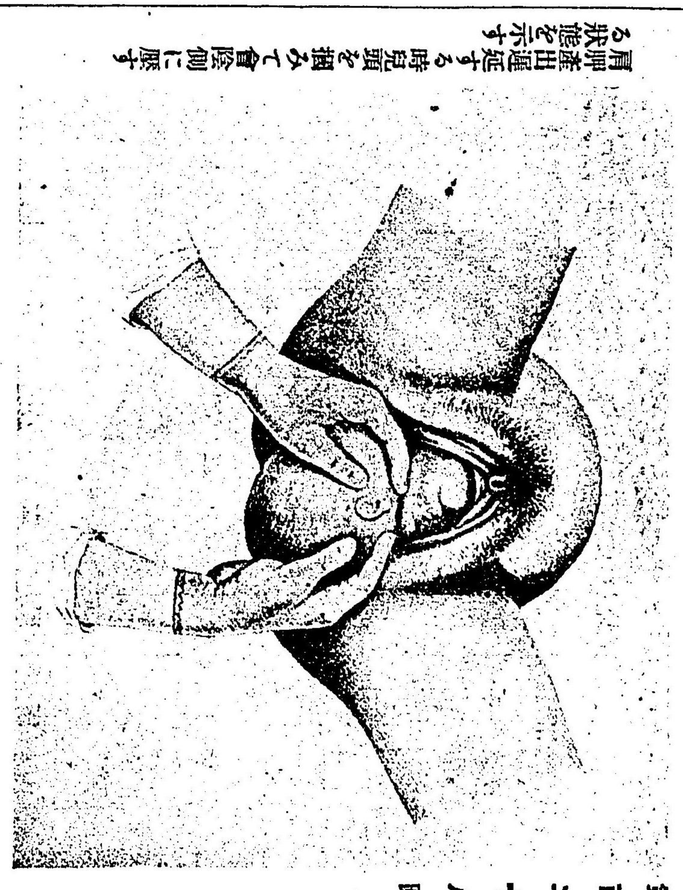
肩胛産出遲延の處置

○兒頭産出スルモ肩胛懷ヲ産出セザルトキハ如何スベキヤ

産婦に努責を命じ尙ほ産婆は手を以て子宮底を輕く骨盤腔内に向つて壓すべし若し其目的を達せず兒に危險の恐あると認むる時は産出したる兒頭を四指を併列して伸ばしたる兩手の間に輕く狹み後方會陰に向て壓し前方の肩胛を耻骨弓下に來らしめ次で兒頭を前上方に擧上する時は後方の肩胛は會陰より産出すべし

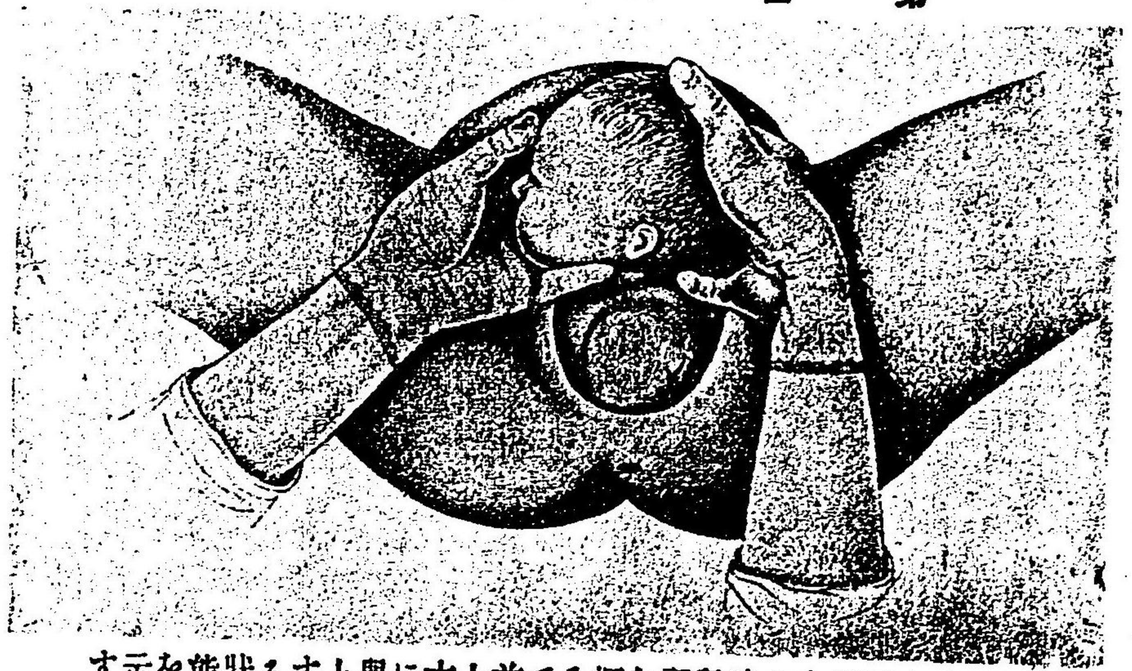
若し之れにても産出せざる時は一手の示指と中指を後頭部に他手の示中兩指を頤部に貼し各他の三指を以て兒の眼及び大顏門等を避けて適當に兒頭を掴み次で之を輕く會陰側に向つて壓し前方の肩胛耻骨弓下に來らば之れを前上方に牽引すべし然る時は後方の肩胛は會陰を通過すべし

以上の二法は簡單にして實用上甚だ便宜なりと雖ども兒頭の



第四二十八圖

第百二十九圖



肩胛產出遲延する時兒頭を掴み方上前てみ上擧に方上前てみ掴を頭兒時るす延遲出產肩胛
す示を態狀るす上擧に方上前てみ掴を頭兒時るす延遲出產肩胛

みを取て牽引するの法あるが故に若し力を用ゆる事大なれば頸部の損傷頸椎の脱臼を來すの弱れあるが故に注意せざる可

欠

MISSING

殊に注意せざれば後出血の恐れあり

臍帶の切斷後兒能く呼吸する時は之れを助手に渡して沐浴せしむるか或は助手なき時は暖かき布片に包み臥床の上に仰臥せしめ置き後産娩出の處置を終りたる後ち自ら沐浴せしむべし

臍帶の切斷終らば産婆は直ちにリゾール水或は石炭酸水に浸せる綿紗又は綿花を以て外陰部及び會陰部を拭ひ其際出血の多少及び外陰部損傷の有無を檢し尚ほ敷布をも檢して出血の量を視消毒綿紗を外陰部に壓抵し置き直ちに一手を母體の腹部に貼し子宮收縮の狀態を檢し（但し子宮堅く收縮せるに拘ず出血するは軟部産道の損傷と知るべし）尚ほ膀胱の充滿せる事なきや否やを檢すべし是れ分娩の間に於ても多量の尿蓄

積するこゝありて子宮の收縮を妨げ後産の産出を妨ぐるを以てなり

此期に於ける唯一の注意すべき點は出血にあるを以て産婆は常に子宮收縮の狀態に注意し外出血內出血共に意を留め産婦を溫暖に且つ靜かに臥せしめ二三分時間毎に外陰部に壓抵せる綿紗を檢し血液の濕潤せるや否や檢め後産期陣痛發起せば産婦に腹壓を命じて胎盤の産出を待つべし

外出血とは出血したる血液の體外に流出するを云ひ內出血とは出血したる血液體內に潴留し身體の外部に流出せざるものを云ふ

後産々出に對する處置

胎盤の剝離せるや否やを知らんと欲せば臍帶の外陰部に顯れたる部に目標を設け其れより何程位脫出せるやを注意すべし既に以前より二寸以上も脫出し子宮底は以前より五六仙迷位上昇し子宮は前後に扁平となり能く移動し耻骨縫際の直ぐ上

第百三十圖　胎盤産出時に於ける取扱法を示す

にて柔軟なる球形物として膨隆せる胎盤を觸るゝに至らば胎盤は全く已に子宮壁より剝離したるものと認め得べきが故に

○娩髓ノ下タルトキノ注意ヲ記セ

○後産ノ一部殘留スルトキハ如何ナル害ヲ來スヤ

胎盤壓出法を行ふべき場合

此の際陣痛と共に産婦に努責せしむるときは容易に産出するに至るべし

胎盤既に外陰部に現はるれば産婆は兩手掌を以て之れを受け徐々に右若くは左に幾回も回轉すべし然る時は卵膜は其捻轉に從がつて自ら剝離し斷裂する事なく牽引せざるも自然に悉く産出するものとす之れに反して若し之れを掴みて牽引する時は卵膜は破れて子宮内に殘留し甚だしき出血を來し或は子宮内に於て腐敗し産褥熱の如き恐るべき病を惹き起すに至るべし

子宮能く收縮し從つて出血なき時は胎盤産出遲延するも心配するに及ばずと雖ども胎兒産出後二時間を過ぐるも産出せざるか或は出血ある場合には胎盤の壓出法を行はざる可らず卽

欠

MISSING

陰部の檢査

敷布の交換

べし次に手指の消毒を行ふ更に五十倍石炭酸水又は百倍リゾール水を以て外陰部及び其周圍を洗滌し次で一手の拇指及び示指を以て陰裂を開き外陰部及び會陰膣等に創傷の有無を檢し若し損傷ありて出血多き時は消毒藥に浸せる綿紗を壓抵し兩脚を緊閉せしめて止血をはかり次で消毒したる綿紗又は灰枕を外陰部に壓抵し丁字帶を施こすべし若し一仙迷以上の會陰其他の破裂を認めば直ちに醫師の來診を乞ふべし而して膣内洗滌は醫師の命あるに非れば之を行ふの必要なし

以上の處置を終らば汚れたる敷布及び腰下の敷物等を清潔なる溫暖にして乾きたるものと交換すべし而して此際成るべく產婦の身體を露出せしめざる樣且つ又身體を動かさゞる樣注意せざる可らず故に衣服の如きは甚だしく汚れたるに非れば

陰部の檢査

敷布の交換

べし次に手指の消毒を行ふ更に五十倍石炭酸水又は百倍リゾール水を以て外陰部及び其周圍を洗滌し次で一手の拇指及び示指を以て陰裂を開き外陰部及び會陰膣等に創傷の有無を檢し若し損傷ありて出血多き時は消毒藥に浸せる綿紗を壓抵し兩脚を緊閉せしめて止血をはかり次で消毒したる綿紗又は灰枕を外陰部に壓抵し丁字帶を施こすべし若し一仙迷以上の會陰其他の破裂を認めば直ちに醫師の來診を乞ふべし而して膣内洗滌は醫師の命あるに非れば之を行ふの必要なし

以上の處置を終らば汚れたる敷布及び腰下の敷物等を清潔なる溫暖にして乾きたるものと交換すべし而して此際成るべく産婦の身體を露出せしめざる樣且つ又身體を動かさゞる樣注意せざる可らず故に衣服の如きは甚だしく汚れたるに非れば

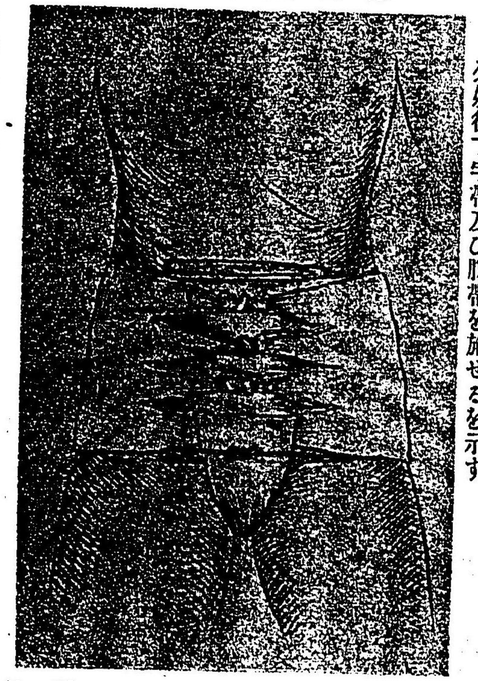
分娩後の腹帶

一二日の後ちに交換するも可あり

腹帶は子宮の位置を保持し其收縮を促がし腹部を温暖に保つの益あるにより必ず之れを用ゆべし但し之を施すには凡そ三尺斗りの晒木綿二枚を重ねて其中央を背部に抵て次で下腹には凡そ六寸角の脱脂綿を布片に包みて貼し其上に背部よりの木綿の内層のものを疊み合せ次で外層のもの丶兩端を數片に裂き以前繞らせる布片の上に於て別々に結び合すべし卽ち第百三十四圖の如し

以上の處置を終り產婆は初生兒の初湯を始むるべしと雖ども慣れたる助手あらば兒の臍帶切斷後直ちに之れを指揮して初湯を終らしむべし其方法は初生兒取扱法の條下に述ぶべきにより之れを參照すべし產婆は母及び初生兒の處置を全く終るも尙ほ二三時間は產家に留まり產婦の傍らにありて其狀態を觀察し殊に時々下腹を觸診し其子宮は硬く球形に收縮せるや否やを檢し尙ほ膣內より血液の流出するを感ずる事なきや否やを問ひ時々外陰部に壓抵せる綿紗敷布等を檢し且つ兒の臍帶斷端より出血する事なきや否やを調べ

第百三十四圖



分娩後丁字帶及び腹帶を施せるを示す

全く異常なきを確めたる後ち始めて器具藥品を取纒め產家を去るべし然れども產家を去る前に於て必らず再び尿の膀胱に充滿せる事なきや否やを檢し若し充盈せる時は便器を挿入して自ら排尿せしむるか若し能はざればカテーテルを以て排尿せしむべし

以上の法則に由て嚴重に處置し終らば分娩の經過は常に正規なるべし然れども民間往々此法則に反せる習慣上の處置法ありて爲めに產婦を危險に陷らしむる事あり例之ば分娩中起坐せしむるが如き或は開口期に於て子宮口を無理に擴張するが如き或は胎胞を早く故意に破るが如き或は初生兒に血液を輸送せんとして臍帶を兒の體に向つて「しごくが」如き或は兒頭發露せるに當つて分娩を早く終らしめんが爲め產婦に强く努

民間に傳はる古來の習慣一として賞用すべきものなし二十世紀以前の產婆は宜しく活眼を開いて現時の產婆學をよむべし

責せしむるが如き皆母及び兒の危險を招くものあり注意せざる可らず

第七章　正規產褥及び其取扱法

第七十九節　正規產褥の經過

產褥の定義

○正規產褥ノ經過ハ如何

分娩後姙娠分娩の爲に生じたる變化の一部分は長く其痕跡を留むるものなり（初姙婦及び經姙婦の鑑別の條下を參照すべし）と雖ども其大分部は分娩後凡そ六週乃至八週の後に於て漸次消滅し殆んど舊形に復するものにして其間を產褥と云ひ產褥中の婦人を產褥婦と云ふ而して分娩後日を追ふて生殖器

產褥の期間はまづ六週間なり而して此の中に產婆に必要なるは主に初めの二週間なり

は一般に復舊するに拘らず乳房は分娩後反つて其變化の度を進め多量の乳汁を分泌し以て小兒を養ふに足るものとす今左に産褥中産褥婦の全身及び生殖器に現はる〻變化を論述せんとす

第一、産褥中褥婦の全身に現はる變化

分娩直後褥婦の狀態

○褥婦ノ身體ニ現ハル變化ヲ記セ

分娩を終りたる婦人は先づ甚だしき疲勞を感じ屢々輕き惡寒を催し暫時にして又溫暖となり續て少しく發汗し陰部に焦くが如き微痛を感じ下腹の不安を覺ゆるの外自覺的苦痛を訴ふること少なく暫時にして眠を催し睡眠中は身體溫暖にして發汗し醒覺後は著しく爽快を感じ疲勞去るを常とす

○生理的ニ産後ニ發スル熱如何及ビ攝度アルヤ

○褥婦ノ體溫及ビ脈搏ニ就テノ注意

脈、は最初頗る頻數なるも五六時間の後多くは緩徐となり一分間六十乃至八十を數へ體溫は分娩後稀れに攝氏三十八度近くあるも多くは數時間にして消退し全經過中攝氏三十八度以上に昇ることなきを常とす若し三十八度以上に昇ることあらば病を發したるの徵あるを以て直ちに産科醫の診察を乞ふ可きものとす皮膚、は溫暖にして常に濕潤し睡眠中若くは醒覺後或は溫き飲料をとれるの後に發汗を來すべし尿、は分娩後一時增量すと雖ども尿道の腫脹腹壁の弛緩等の爲め反て排尿の回數を減じ膀胱は充滿するも永く排尿し能はざることあり大便、は身體の安靜と腹壁の減少に由て初め一週間位は秘結するを常とすれども漸次に舊に復し食慾、は初め二三日間減退するも次で舊に復す而して褥婦は發汗授乳惡露排出等の

尿閉

○褥婦ノ便秘スル理由ヲ述ベヨ

○褥婦ノ三分泌トハ如何

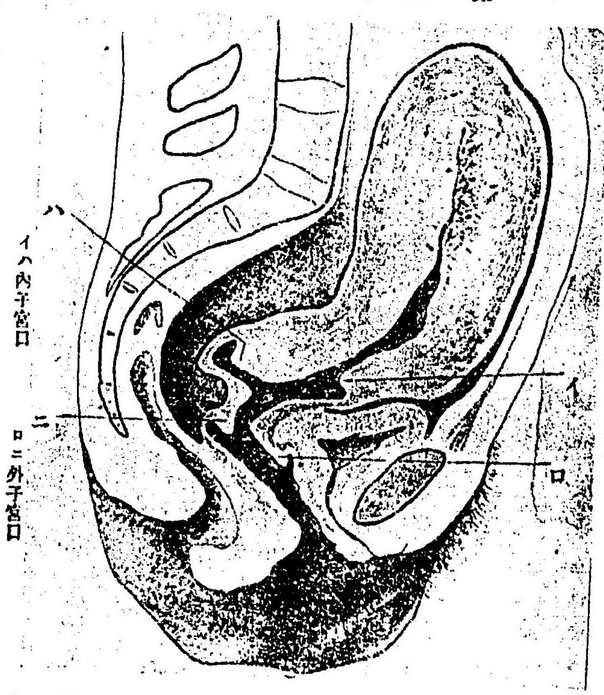
爲めに身體中の水分を失ふが故に通常甚だしき口渇を訴ふるものとす以上の發汗惡露排泄乳汁分泌を稱して褥婦の三分泌と稱するものなり毛髮、は産後多少脱落し精神、は過敏となるもの多し

第二、産褥中褥婦の生殖器に現はるゝ變化

分娩直後生殖器の狀態〈分娩直後褥婦の殊に生殖器の狀態を見て産褥婦たるの鑑定をなすの必要あり〉

分娩直後子宮は硬くして球形を呈し弛緩せる腹壁上より能く觸知するを得べく子宮底は恥骨縫際上四指又は五指横徑の高さにあり子宮口は擴大して容易に一手を通ずるを得べく子宮口緣は不正圓形にして弛緩し屢々數多の裂傷を生じ膣も亦た甚だ弛緩し廣濶にして屢々裂傷を認め外陰部及び會陰は甚だ

第百三十五圖



分娩直後子宮の狀態を示す

しく過敏にして弛緩し屢々強く腫脹し裂傷を存し處女膜は甚だしく斷裂す子宮腔内は卵膜及び胎盤の剝離に由りて一般に新しき創面を呈し殊に胎盤の附着部は血管の斷口より出血

○産後日ヲ經ザルモノノ經別法ヲ記セ

外陰部及び會陰の復舊狀態

すこ雖ども子宮の收縮と共に血管の斷口も亦た縮小閉塞し甚だ僅少の血液を漏出するのみ此の如き變化は時を追ふて舊狀態に復するものあり今此復舊變化を各部に就て述ぶれば左の如し

外陰部及び會陰、は分娩後凡そ一晝夜を經過する時は腫脹減退し最早過敏ならず裂傷挫傷等の損傷は充分の清潔を保ち化膿を防ぐ時は多くは數日にして治癒すべし而して**膣の下部分**は大凡そ數日の後舊に復して狹小となるべきも上部卽ち**膣穹窿部**は復舊に長時を要し或は屢々久しき間廣くして弛緩せる事あり

子宮の舊復狀態

○産褥子宮復故ノ狀況ヲ記セ

子宮、は姙娠分娩中殊に變化の著しきものなるが故に其復舊原象に於ても亦た著しき變化を呈し産褥の初に於ける子宮は

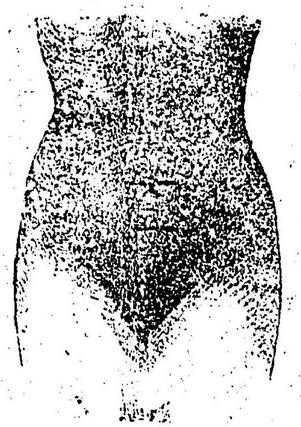
凡そ一千瓦の重さを有するも六週を經ば大凡そ五六十瓦となり姙娠中に肥厚增殖したる粘膜筋組織等は急に崩潰して一部は再び血液中に吸收せられ一部は惡露として體外に流出し分娩に由て消失せる子宮粘膜の一部分は新たに生ずべし

外子宮口及び子宮頸管は産褥の始め數日間は容易に數指を挿入し得べく子宮口緣は廣くして弛緩し葉狀を呈するも十一二日を經れば內子宮口は縮小して手指を通ずる事難く子宮膣部も亦た其形ちを具ふるに至る然れども姙娠前に比すれば太く短く且つ柔軟にして分娩時に生じたる裂傷の爲めに子宮の全く復舊せる後に於ても尙ほ瘢痕を殘すものとす

子宮體は分娩直後一旦非常に縮小するも數時の後に至れば再び少しく增大して子宮底部は凡そ臍部の高さに達し爾後日を

産褥初期に於ける子宮底の高さを示す

第百三十六圖



×は臍部　横線は子宮底の高さ
數字は分娩後經過の日數

追ふて縮少し第五日には臍と恥骨縫際の中央まで下り九日十日目に至れば恥骨縫際上に於て半球形の子宮底を觸るゝのみとなり十二日乃至二週間を經過する時は恥骨縫際の後方に隱れ單純の外診のみにては腹壁上より觸るゝ能はざるに至るべし

扁靱帶圓靱帶の復舊狀態

扁靱帶及び圓靱帶、は分娩直後に於ては甚だしく弛緩し子宮の縮少に伴ふて縮少する能はざるが故に子宮は産褥の初めに於て殊に能く移動し膀胱の充盈大便の蓄積腹壓等に由て容

易に位置を變ずべし然れども是等の靱帶も日を追ふて縮少し攝生法宜しきを得る時は子宮は一二ヶ月の後ちに姙娠前と同一の位置を保つに至るべし

後陣痛

○後陣痛トハ何ゾ　且ツ其強弱ヲ擧ゲヨ

産褥の初めに於て急速に子宮の縮少するは**後陣痛**と稱する子宮の收縮に由るものにして經産婦に在りては強く發起し從つて疼痛を感ずる事烈しく初産婦は之れを感ずる事稀れなりと雖ども唯だ分娩經過の非常に急速なりし時過大の胎兒雙胎羊水過多症の時殊に子宮内に卵膜胎盤の殘片が遺殘せるか若くは凝血の溜まりし時には之れを感ずる事強し經産婦に於ても此の如き場合は殊に強く發起すべし而して授乳は一般に後陣痛を誘起すべし

○惡露トハ何ゾ

正規産褥間に於て陰部より排出する液を稱して**惡露**と云ひ

○惡露ノ性狀及ビ持續ヲ記セヨ
○惡露トハ何ゾ淋菌性分泌物トノ鑑別ヲ記セヨ
○惡露ノ性狀ヲ記セ
○惡露ノ經過及ビ性狀ヲ記セ
○惡露トハ何ゾ淋菌性分泌物トノ鑑別

子宮內面の新らしき創傷面より分泌する液體と血液粘液脫落膜の殘片とよりなるものあり而して産褥の初め二三日間に在ては純粹の血液よりなり屢々大小の凝血及び脫落膜の殘片を混じ膣の粘液を混ずるが故に少しく粘稠なれども一樣に赤色にして少しく褐色を帶び三四日後に至れば少しく稀薄となり色も亦た消退し漸次水樣となり量も亦た漸次減ず七八日後に至れば更に變じて帶黃白色頗る粘稠となり子宮內創面の治癒する迄持續するものにして大凡三週の後に至りて止む而して一般に授乳する婦人に在ては子宮の收縮よろしく其創面も速かに恢復するが故に惡露の止む事早きも授乳せざる婦人に在ては是より尙ほ時を要するものあり

惡露の分量及び臭氣は各人一樣ならざるのみならず同一の人

乳房の變化及び乳汁分泌

乳汁分泌の盛となる時期

○初乳ト常乳トノ區別及ビ初乳ヲ小兒ニ飲用セシムルノ利害

にても産褥の時期に由て異あり産褥の四五日頃に於ては臭氣最も高しと雖ども決して腐敗樣或は大便樣の惡臭を放つ事あし若し此の如き惡臭を放つ事あらば褥婦に病を發したるの徵候ありと知るべし

乳汁分泌、　は既に姙娠中より用意せられ分娩の際既に頗る多くの乳汁を乳房內に含むと雖ども其著しき分泌は分娩後第三日乃至第四日に始まり其以前乳房は著しく腫脹膨大し知覺過敏となり稀れには牽くが如く或は刺すが如き疼痛を感じ甚しきに至ては肩胛を動かす事さへ出來ざる事あり然れども一日乳汁分泌始まれば疼痛は去り乳房も亦た弛く小兒に乳を授くる事の多きと小兒の能く哺乳するとに從がひ其分泌は益盛となるものとす而して初めに分泌する乳汁は水の如く淡くし

初乳
初乳は鹽分に富み初乳球を含み半透明なるも分娩四五日後に至れば漸次眞乳となり脂肪蛋白質及び乾酪質を增し初乳球消失す

○乳汁ノ成分ハ如何

て中に帶黃白色の線狀物を混じ乳房を壓搾すれば大なる滴となりて漏出す之れを初乳と云ひ多量の鹽類を含有するが故に初生兒に與ふれば大便の通利を促がし胎糞を排泄する效あり然れども日を經るに從がひ眞の乳汁に移り行き分泌多量となり帶黃白色平等の液體となり乳房を搾れば線狀をなして噴出するに至る今乳汁の成分を列記すれば左の如し

液分	水	八九、〇
固形分	脂肪	三、〇
	乾酪質	四、〇
	乳糖	四、〇
	鹽類	〇、一五

乳汁の分泌は九乃至十ヶ月間持續すれば漸次減少して止むを

常ごすれども時ごとしては二三年も持續する事あり而して多くの婦人に在ては授乳の間は月經の閉止を來すものにして八ヶ月乃至十ヶ月の後授乳を止むる時は乳房は數日の後弛緩し分泌は日を逐ふて減少し終に全く止み乳房も縮少し月經も再來するに至る之れに反して乳を授けざる婦人に在ては乳汁分泌は日あらず止み分娩後六七週に於て月經の再來を見るべし

乳汁分泌の量は精神の感動身體の過勞により減じ其他飲食物の多少營養の良否に關し又た梅毒結核等の病毒は乳汁中に移り行き從つて小兒を害し多くの藥も亦た乳汁中に移行するものとす

○常規産褥兒母ノ攝生法

○褥婦ノ攝生法ヲ記セ

第八十節　産褥婦の攝生法竝に其取扱法(褥婦の看護法)

褥婦攝生法の目的は姙娠及び分娩に由て起れる全身殊に生殖器の變化の復舊を催進するに在り若し是れ等の變化にして速かに舊に復せざれば或は出血或は發熱等を起し終には恐るべき産褥熱の如き疾病を起すに至るべし而して産褥中初め一週間は最も屢々此の如き異常を呈すべき時なるが故に産婆は褥婦をして充分の攝生法を守らしめ復舊作用を妨ぐるが如き事は勉めて排除すべし今左に産褥の初めに於ける攝生法の主なる條件を列記すべしと雖ども是れ等は産褥の初めのみならず全期間を通じて嚴守すべきものある事を忘れず注意を怠るべ

○褥婦ハ分娩後幾日間靜臥セシムベキヤ褥ヲ速カニ起立歩行セシムルトキハ如何ナル障害ヲ來スベキヤ

からず

一、安靜(身體精神殊に身體の安靜)　二、清潔(殊に生殖器)　三、大小便の通利　四、飲食物　五、被服　六、授乳

安靜、安靜は殊に産褥婦に必要なるが故に産褥の初め一週間は常に靜臥せしめ決して坐し或は起立せしむべからず殊に仰臥を旨とし側臥の如きも四五日後に非ざれば之を許さず敷布等を交換するにも少しも身體を動搖せしめず臥床交換は醫師の命あらば同じく身體を動搖せしめざる樣傍より之れを抱へて必らず床より床に移すべく乳を授くる時の如きも唯だ僅かに上體のみを側方に向け肘を以て之れを支へしむべし又た排尿は初め三四日間は仰臥のまゝ爲さしめ其以後は靜かに俯臥

○褥婦早期の起床歩行努責等は生殖器の復舊を防げ出血の子宮位置の異常殊に子宮下垂症を起し又た屢々産褥熱等の恐るべき病を發す

○褥婦精神上ノ攝生法及ビ離褥ノ時期

○褥婦ノ清潔法竝ニ消毒法ヲ詳記セリ

○褥婦外陰部ノ手當ヲ記セ

の位置を取らしめ床上にて便器に受け大便は常に仰臥のまゝ便器を挿入し通利せしめ決して努責せしむべからず而して産褥室には産室をあつるを得べく常に攝氏二十度位の溫度を保たしむべし

精神の安靜も亦た甚だ必要なるが故に褥婦が臥床に在る間は他人の訪問を拒絶し喜怒哀樂共に感情を刺戟するものは其事物の何たるに關せず嚴重に之れを避けしむべし

清潔、産褥の初め一週間は毎日二回其後は一回宛五十倍の微溫石炭酸水を綿紗に浸して外陰部を叮嚀に拭ひ創傷あらば沃度仿謨末を撒布し次で消毒したる綿紗數枚を重ぬるか或は消毒綿紗に脱脂綿を包めるもの又は灰枕を外陰部に壓抵し丁字帶を以て固定し漏出せる悪露を吸收せしめ汚染する毎に交換し敷布等も亦た汚染する時は度々交換せざるべからず而して膣内の洗滌は正規の經過を取るものに在ては之れを行ふの必要なく却て不完全の洗滌に由て傳染毒を輸入する事あり然れども悪露に悪臭を放つ時は産科醫の診察を受け其命令あらば五十倍微溫石炭酸水又は百倍リゾール水を以て注意して洗滌を行ふべし此時に於ては先づ充分手指外陰部を消毒したる後に於てせざる可らず

大小便、大小便の通利は最も注意を要すべきものにして分娩後排尿なく之れを催すも自利せざる時は「カテーテル」を以て排尿せしむ、膀胱の充盈は子宮の恢復に向つて甚だ害あるものにして殊に褥婦は毎日屢々排尿せるにも拘はらず往々膀胱中に多量の尿を充たし尿意を催さゞる事あるが故に單に排尿

の度數を聞しのみにては誤りを生じ易し故に産婆は必ず褥婦の下腹部を觸診して其充盈せる事あきや否やを確めざるべからず大便は健康ある褥婦に在ては分娩後三日間は之れ無くも甚だしき害なく寧ろ腸を安靜ならしめ生殖器の復舊に向つて都合よきものあれども第四日目に至るも尚ほ便通なきときは「グリスリン」又は石鹼水或は微溫湯を以て浣腸を行ひ爾後續て秘結するものには三日毎に之を反復すべし下劑を與ふるは産婆の權限内に屬せず

浣腸の方法に就ては後編看護法の條下を參照せよ

飲食物、食物は産褥の初め一週間位の間は牛乳スープ粥汁鷄卵等の流動物を與へ身體虛弱なるものには少量の赤酒を與ふべし三四日の後自然又は浣腸に由て充分の便通あらば褥婦の食慾は亢進するものあるが故に他に異常なき限りは米粥を食せしむるも可かれども牛乳卵等は併用するを良とす而して分量は常に適當にして一度に多食せしめず少量づゝ度々に與へ一週後に在ては漸次米飯柔軟ある脂肪少なき魚肉、獸肉等を與へ芥子、生薑、胡椒の如き香料を禁じ常に風氣を釀さゞるものを撰び漸次固形の食餌に慣れしめ二三週間後に至て全く常食に復せしむべし古來云ひ傳へたるが如き六ヶ敷禁物をあすの必要なきものとす飲料は清水麥湯等を良とす口渴あれば

○産褥婦ノ衣服及ビ産褥室ニ就テノ注意ヲ記セ

とて多量の飲料を與ふるは良しからず

被服、衣類は寛かにして輕く暖かなるものを撰び分娩後一週間は甚だしく汚染し若くは汗の爲めに濕はざる限りは餘り屢々交換せざるを良とすゆゑに發汗あらばその都度乾布を以て之れを拭ふべし然る時は單に衣類の濕潤を來さゞるのみならず

○正規産褥ニ於テ産婆ノ最モ注意スベキ件ハ如何

○褥婦ヲ毎日廻診セルトキ如何ナル點ニ注意スルヤ要スル

○褥婦ニ於ケル産婆ノ要務

ず感冒にかゝる事を防ぎ得べし

蒲團は輕く暖かゝるものを撰ぶべし産褥時の腹帶は大に必要なれども姙娠中の腹帶に比すれば人の注意をひく事少なく之れを等閑に附するもの多し是れ吾人の屢々實驗する處なり産褥時の腹帶は生殖器殊に子宮の恢復の爲めに極めて大切なるのみならず腹壁の弛緩を豫防して種々の生殖器病腸の疾病を未發に防ぐ功あるを以て褥婦をして長く之を纏はしめ殊に起立を始むるの時期に於て必要あり

以上の攝生法を守らしめんが爲め且つは諸種の疾病を未發に防がんとするには産婆は産褥の初め一週間は毎日二回褥婦を訪問し注意して先づ體温脈搏を檢し出血の多少大小便の通利乳汁分泌の模樣發汗の多少竝に下腹其他に於ける疼痛の有無

睡眠の狀態食慾口渴等を問ひ腹部を觸診して子宮底の高さ子宮の硬軟(子宮收縮の狀態)壓痛の有無を檢し次で陰部に壓抵せる布片を檢して出血の多少惡露の性質殊に其臭氣創傷の模樣を檢し尚ほ忘れざる樣乳房を檢し其膨大の度疼痛の有無之を壓搾して其分泌の模樣をも檢せざるべからず而して體温昇騰するか脈搏頻數あるか惡露惡臭を帶ぶるか子宮の收縮あしきか出血多量あるか創傷の模樣に變化を來すか其他異常を發見する時は直ちに産科醫の往診を乞はしむべし

産婆訪問の際は常に初生兒の處置を先に行ひ然る後褥婦の檢査を行ひ又た褥婦に就ても乳房の檢査を先きにし次で生殖器を檢すべし何となれば生殖器の檢査を先きにすれば其不潔物は産婆の手指に附着し兒の臍部或は眼若くは乳房に達して危

險の疾病を起す事あればあり而して一週間後の訪問は褥婦の狀態及び褥婦の希望により又は醫師の命令に由て定むべし

産婆訪問の際は外陰部壓抵布の交換法授乳の方法其他の産褥婦一般の攝生法初生兒温浴法等は細大漏さず家人に敎へ置かざるべからず何ことあれば産婆の訪問し能はざる時に於て已を得ず家人に托せざるを得ざる場合あればあり而して日々訪問し得る場合に於ても壓抵布交換あゞ家人に托すべき事數多あるを以て消毒的の事柄は殊に注意して敎へ置くを良とす若し善良なる看護婦を有する家ならば産婆は之れに托して可あり其際交換せる壓抵布は一日分を順序よく重ね置くを命じ産婆訪問の際其臭氣及び汚染の度に由て出血の多少惡露の性狀を察すべし

起座及び離褥の時期

産褥經過正規にして出血發熱等の異常あくば分娩後八日に至て褥婦は始めて臥床に起坐し得べく十日を過ぐれば少かに床を離れて室内を歩行して可なり然れども初めは少時間を限り漸次其時間を增さしむべし二週間後に至れば褥室を離れて他室に到り得べしと雖ども椅子に腰掛くるが如き楷段を昇るが如きは尙ほ堅く禁じ三週間に至り氣候温暖にして天氣晴朗なる時は注意して庭園内の平坦ある處にて散歩さするも差支へあし然れども冬季雨天等に在ては五六週間後に至らざれは宜しからず重荷を持ち或は長途の旅行楷段の昇降等は成るべく二ヶ月後に於て許すべし

坐浴は陰部の創傷あきものに在ても二週間後に至らざれば許すべからず彼の六日目(七夜)に坐浴を許すが如きは甚だ不可

○授乳上ノ注意

○授乳ニ就テ注意スベキ事項ヲ列記セロ

初めて授乳すべき時期

なり而して坐浴をなさしむるには極めて注意し膣内に手指を挿入して洗ふが如き事をあさしめず温暖なる室内に於て一旦煮沸したる湯を其まゝ適度に冷したるものに浴せしむべし全身の入浴は三週間後に非ざれば許可すべからず

授乳、母自から初生兒に乳を與ふるは小兒の健康上甚だ必要なるのみならず母體に於ける産褥の經過を佳良ならしむるの益あり即ち授乳すれば食慾は亢進し子宮の收縮を促がし悪露の閉止を早からしむるの益あるが故に健康なる婦人に在ては産後六時間乃至八時間を經過し其疲勞去り兒は餓に泣くに至らば必らず乳を授くべし古來習慣し來れるが如き毒下しとて五香其他下劑を飲ましめて兒を衰弱せしむるが如き或は他人の乳を與へ或は甘草煎砂糖湯等を飲ましむるが如きは一切之れを禁ずべし唯だ産褥の始め一二日は屢々乳汁分泌の不充分なる事あるを以てかゝる時は後章述ぶる人工營養法に從て稀釋せる牛乳を與ふべし

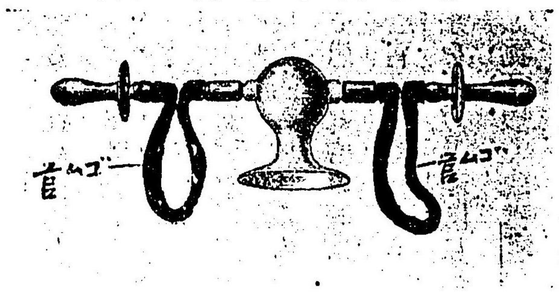
○授乳ヲ禁ズベキ母體疾病ノ名稱及ビ離乳ヲナシ得ベキ小兒ノ最低年齢ヲ問フ

○授乳ヲ禁ズベキ母ノ體質及疾病ヲ記セ

然りこ雖ども前に述べたるが如く母の病毒は乳汁中に入り從つて兒の體中に移り行きて初生兒を害するが故に梅毒、結核、癲癇、癲病、及び其他の精神病あるもの或は神經質のもの慢性皮膚病を患ふるもの體質虚弱にして結核の血統あるもの脚氣を患ふるもの等は全く授乳を廢し善良の乳母を撰みて小兒を養育せざるべからず但し此際授乳を廢するには必ず醫師の診察を受け其差圖に從ふを良とす

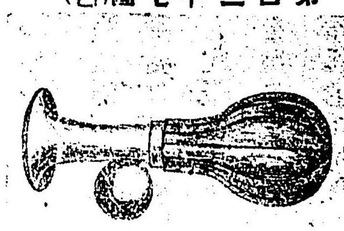
若し乳頭短く或は乳房扁平にして哺乳困難ある時は屢々手指を以て乳頭を摘み出し或は吸乳器を以て之を吸ひ出し若し乳

第百三十七圖（甲）



吸乳器を示す

第百三十七圖（乙）



同

房の皮膚薄弱なる時は「アルコホル」を塗布し之に反して乳頭硬きに過ぐゝ時は油類を塗布する等姙婦攝生法の條下に於て述べしが如く取扱ふべし

乳汁分泌僅少なるも褥婦をして授乳を廢せしむる事なく牛乳肉汁脂肪少なき肉類等の營養物を攝取せしめ傍ら多量の飲料を與ふべし

授乳期中の攝生法

授乳期中母體の精神感動飲食物の不攝生等は獨り母體の健康に害あるのみならず乳汁の性質に變化を來し爲めに兒を害する事あるを以て產婆は茲に注意し勉めて母體の精神を安靜ならしめ新鮮の空氣中に適當の運動をなさしめ食物は風氣をかもさず營養物に富み消化し易きものゝみを撰びて攝取せしめ大小便の通利を規則正しくせざるべからず故に若し大便秘結する時は姙婦の攝生法に述べたるが如く能く熟したる菓物或は毎朝一碗の微溫湯を飲ましめ若し甚だ便秘する時は浣腸を行ふを良とす

乳腺炎の豫防法

授乳期中乳頭を不潔ならしむる時は屢々乳汁の排泄管閉鎖し乳汁は乳腺內に蓄溜し或は乳腺內に微菌侵入して乳腺炎を起し乳房の腫脹疼痛を發し終に化膿に陷り大に母體を苦むる事

あるが故に乳頭は常に清潔を保ち授乳の前後は必らず清潔なる水を以て洗ふを良とす若し乳頭に龜裂等を存する時はよく乾燥せしめ乾きたる綿紗にて被はしむべし

○初生兒正規ノ經過ヲ問フ

臍帶の附着胎脂沈着胎屎產瘤の遺存等は以て初生兒たるを鑑足するに足る

○初生兒ノ微候ヲ記セ

第八章　初生兒及び其看護法

第八十一節　初生兒

初生兒とは產出當時より臍帶脫落して其痕跡だも認め得ざるに至る迄の間を云ひ其期間は分娩後十日乃至二週間にして此時期を過ぐれば最早初生兒と云はずして小兒と云ふ

健康なる胎兒は生るゝや直ちに高聲を放ちて泣き活潑に呼吸

○初生兒ノ初メテ呼吸スルハ何故ナルヤ

兒分娩し胎盤剝離を始むる時は兒の體中酸素の減少を來し血液は靜脈性となり呼吸中樞を刺戟するが故に第一呼吸を始むべし

を始むるものにして之れを第一呼吸と云ふ之と同時に今迄胎兒の營養及び呼吸を司どりし胎盤血行は全く止みて全血行は大人と同一になるべし卽ち臍動靜脈アランチー氏靜脈管の血流止みポタリー氏管及び卵圓孔は閉ぢ肺動靜脈の血行盛となり血液は肺中にて新鮮とせらるゝに至り營養器官卽ち消化器も亦た大人と等しく活動を營むに至るべし

初生兒の體溫は分娩後一時沈降して攝氏三十六度乃至三十五度となると雖ども十數時間の後に至れば三十七度に達し以後再び下降する事なし脈搏の數は一分時間百二十呼吸は一分時間三十乃至三十六にして脈搏呼吸共に兒の生長につれ其數を減ずるものなり此の如き狀態にありて發育佳良なる初生兒は常に善く眠り襁褓が大小便の爲めに浸るか若くは餓を覺ゆる

兒は先天的に生活の方法を知り生るや直ちに呼吸を始め哺乳のみちを知る

時に非ざれば啼泣する事なく其泣くや強く且つ高き聲を以てし發育不良の兒の如く持續性に弱き聲を放つ事なし又た乳頭を含ましむれば強く吸引し盛に哺乳をなすと雖ども初生兒の消化器は未だよく發育せざるを以て一時に大量を容るゝ能はず極最初に於ては漸く四十瓦乃至四十五瓦位を容るゝに止まり從つて一回に吸引する所の乳の量も之れに準じて少なく日を經て消化器の發育すると共に其量を增すものとす

消化力は大人に比すれば甚だ弱く胃は母乳なる時は約二時間の後牛乳なる時は約三時間の後に於て空虛となるべし而して唾液の分泌は初生兒に在ては甚だ少おし

大便は初め二三日の間は暗綠色粘稠の物質にて姙娠中胎兒の腸內に蓄積したるものなり之を胎屎(たいし)(又は胎糞(たいふん))と云ひ自然に

臍帶殘部の脫落

臍帶の殘部は黑色に乾燥するも其附着部丈けは濕潤して僅かに膿をかもすことあり

或は初乳の下劑的の働きによりて全く排泄せられ二三日後は黃金色の粥狀をなせる大便(乳便とも云ふ)となり一日二三回通利すべし

尿は分娩後第一日に在ては甚だ少おく且つ少しく溷濁(こんだく)するも漸次透明となり一日數回の排尿をおすに至る

臍帶の殘部は日を經るに從がひ乾燥し分娩後早きは二三日遲きは八日以後平均第五日に於て自から脫落し脫落後は瘢痕(はんこん)を結んで治癒し中央部凹(くぼ)み臍窩を形成し平均二週日に至れば少しの創面をも發見し能はざるに至る

分娩の際蒙りたる兒頭の變化は一二日の後ち自然に恢復し產瘤も亦た其大小により差あるも日ならず消退するものとす

以上の如くにして初生兒は漸次發育肥滿すべしと雖ども大小

兒發育の良否は體重に由て知る

○初生兒分娩シタル場合處置如何

便の通利及び不充分の哺乳等の爲めに分娩後第四日迄は漸次體重を減じ第八日乃至十日に至りて分娩當時の體重に復し以後日を追ふて增量し第四ヶ月の終りに至れば分娩時の殆んど倍量となり十二ヶ月の終りには三倍となるに至るべし而して兒の體重は其發育の良否を示すものなるが故に一週毎ごに一回づゝ沐浴の前に之れを測り記載し置くを要す

第八十二節　初生兒の看護法

産婆は初生兒の臍帶切斷を了り胎盤も亦産出し出血等の異常なく外陰部の處置及び敷布交換等を終らば初生兒の初湯をなすべし

○正規嬰兒ノ處置ヲ記セヨ

○初生兒ノ處置ハ如何

○初生兒ノ看護法

耳内に溫湯進入する時は中耳炎其他の病をひき起すべし

○初生兒沐浴法

○初生兒第一回溫浴ヲ行フニ就テノ注意ヲ記セ

初生兒沐浴の際は先づ臍帶斷端より出血する事なきやを檢すべし

初生兒の初湯

初生兒初湯即ち第一回の沐浴を爲さんと欲せば浴槽中に攝氏三十四五度の溫湯を取り（湯の加減は必ず浴用檢溫器を以て測らざるべからず）次で西洋手拭の如き布片一枚を以て兒の身體を包み左手を以て顏面を上にして頭部及上體を支へ耳内に水の進入を防ぐ爲め左手の拇指及小指を以て兩耳翼を壓へて耳孔を塞ぎ徐々に頸部以下を浴湯中に浸すべし次で清潔にして軟かき布片を右手に取りて徐々に洗ひ全身に附着する胎脂（皮垢）は阿列布油或は華攝林、卵黄等を塗布して之を拭ひ去り頭部にも亦た卵黄又は阿列布油を塗布して洗ひ顏面殊に眼は別に設けたる清潔なる溫湯及び布片を以て能く洗ふべし（眼を洗ひ又は拭ふには必ず指を外眥より内眥に向つて送る

べし）然る後乾燥したる湯上に上ぼせ（大なる西洋手拭を良とす）床上又たは産婆の膝の上に於て叮嚀に全身を拭ひ乾かし頸部腋窩鼠蹊部等皺襞の存する部には必らず亞鉛華澱粉の如きものを撒布し次で臍帶斷端の處置を行ふべし但し入浴時間は十分間を越ゆべからず

體質薄弱の兒なる時は初湯を中止するものあれども凡て沐浴の目的は身體を清潔にし皮膚を強からしめ血行を盛にし營養をよくし從て兒の發育を盛ならしむるに

第百三十八圖

初生兒溫浴の方法（其一）

體質薄弱なる兒の初湯

あるが故に必ずこれを行ふをよしとす而して初生兒を入浴せしむる前には必ず臍帶斷端を檢し出血する事なきや否やを確かめ若し出血あるときは更に強き結紮を行ひたる後に入浴せしめ入浴中も臍帶を牽引する事なく且つ出血の有無に注意するを要す而して入浴中及入浴後全身を拭ひ衣服を着せしむるまでの間に於て能く兒の全身を檢査し兩性の別兎唇、駢指、鎖肛、等の畸形の有無を檢し若し異常を發見するときは密かに家人に告げ醫師の診察を乞はし

第百三十九圖

同（其二）

初生兒全身の檢査

○初生兒沐浴後臍帶ノ處置ヲ記セヨ

第百四十圖

同（其三）

むべし

臍帶斷端の處置

臍帶斷端の所置を行ふには最も消毒に注意すべし卽ち先づ産婆の手指を消毒し次で臍帶斷端を五十倍石炭酸水に浸せる綿花を以て能く拭ひ出血の有無を檢し若し出血あるか或は結紮絲弛緩せるときは更に緊密に結紮を行ひ斷端には沃度仿謨末、硼酸末、又は「デルマトール」亞鉛華澱粉の如きものを撒布し方三寸許りの殺菌綿紗一二枚を以て輕く臍帶殘部を

○初生兒ノ攝生法ヲ記セヨ

小兒の溫浴は清潔のみならず皮膚を强壯ならしめ血行を盛にするの益あり若し不潔ならし

臍脫腸の豫防法

卷き或は綿花を以て包み腹部の左側に横たへ一二枚の殺菌ガーゼを以て被ひ次で幅凡そ三寸長さ凡三尺許りの晒木綿又は「フランネル」の殺菌せるものを以て繃帶すべし此の繃帶の際は臍帶を牽引する事なき樣に注意すべし而して此繃帶は毎日小兒溫浴の度毎に交換し臍帶殘部脫落後も臍輪より腸管の脫出卽ち臍脫腸を防ぐ爲めに生後半ヶ年間位は引續て纏絡するを良とす

初生兒溫浴後の攝生法

兒の清潔、は健康上大に必要にして初生兒のみならず一年以内の小兒にあつては成る可く毎日殊に夏日は必らず入浴せしめ尙ほ毎日數回内股及び臀部背部等を檢し若し尿、屎等に

むる時は內股腋窩其他皮膚皺襞間の糜爛を招き且つ皮膚の發疹等を來すべし

○初生兒ノ衣服及ビ身體清潔上ノ注意ヲ記セ

付紐を胸の上にて堅く結ぶなかれ兒の呼吸を妨げ軟かなる胸廓は爲めに形を變ずる事あり

汚染せらるゝ事あらば其都度叮嚀に清拭し襁褓を清潔なる乾燥したるものと交換し小兒温浴後は內股腋窩等の濕潤糜爛し易き部分に等分の亞鉛華澱粉を撒布するを良とす而して毛髮は分娩後凡そ一二ヶ月を經過し甚だ長く延びたるときは短く剪斷すべしと雖も古よりの習慣の如く生後二週日目に剃髮するは未だ發育せざる腦を刺戟し甚だしき害をなす事あるを以て禁ずるを良とす爪も亦た分娩後凡そ二週日を經過せば短く剪去し爾後時々剪刀を以て摘み取るべし

小兒の衣服、

は氣候の寒暖によつて異りと雖も一般に寬かにして輕く且つ强く身體を緊迫せざるものを撰ぶべし大阪以西にては小兒を少なる蒲團中に包み込むの習慣あり此の如きは上下肢殊に下肢の運動を妨げ小兒の發育上大害あり而して

毛絲の頭巾は最も適當なり

温度は大人より常に少しく暖かあるを良とすれども世間にては往々甚だしく厚着せしむるの僻あるにより產婆は此習慣を脫せしむる樣心懸くるを要す頭部は寒風に晒さゞる樣空氣の流通能き頭巾或は眞綿を以て被ふを良とすれども暖かある天氣に頭巾を被らしむるは反つて害あり衣服の交換は每日あるべし殊に尿屎等の爲めに汚染せらるゝときは其都度取り換へ夜具は輕くして軟かあるものを撰び屢々日光に晒すべし臥床は暗きに失せず直接光線の透射せざる室內を撰びて設け寒冷あるときは温婆を以て温度を加減すべし

分娩後二週間を經過したる健康ある小兒にあつては日中温暖なる時を撰び室外に伴なひ一二時間宛新鮮ある空氣に觸れしむるを良とす然れ共此際身體を動搖せしめざる樣注意すべし

子守歌をうたひて兒の眠りを催すは全く腦を刺戟して麻醉せしむるによる身體の振動亦然り

三四ヶ月後に至れば動搖せざる子守車に乘らしむも害あしと雖も搖籠或は小兒の啼泣を慰めんとして小兒を振動するが如きは良しからず又身體薄弱ある殊に產後未だ日を經ざる兒を脊負ふが如きは小兒の胸部及び腹部を壓迫して發育を害し時としては背上に頭を垂れて睡眠し之が爲めに鼻孔を閉塞して窒息する等の事あるを以て注意せざるべからず又無意識の小兒を愛撫して高聲を以て喚び或は睡眠せしむるため高聲を以て歌ふ等は過敏なる小兒の聽官を刺戟し甚だしき害を來すべく又小兒を接吻するが如きは殊に注意を要するものにして是れが爲めに梅毒結核其他の病毒を傳染せしむるの恐れあり小兒は頸部薄弱にして頭部を支へ難く全身一般に軟弱ある を以て生後三四ヶ月間は床中に横はらしむるか或は抱きて決し

小兒消化不良の徵候

て起坐せしむべからず既でに三四ヶ月を經過し自ら頭部及び背部を支へ得るに至るも成るべく起坐せしめざるを良とす小兒大小便の通利は殊に注意を要するものにして常に襁褓を以て之れを受け若し生後一晝夜を經過するも排尿あきか或は排尿するも異常あらば醫師の診察を乞はざるべからず大便は兒の食物の適否を現はすものにして黃色便の變じて綠色となり或は白色となり或は塊狀を呈するか若しくは一晝夜五回以上の便通を見るときは消化不良の徵なるを以て醫師の診察を乞はしめ若し一晝夜間一回も通利あき時は微溫湯に等分の牛乳又は佛里設林を混じたるもの少量を浣腸し若し功あきときは醫師の診察を乞はしむ可し

初生兒膿漏眼の豫防法

初生兒膿漏眼の豫防法

母若し痲疾を患ふるときは胎兒産出の際膣内に存する痲毒は兒の眼に觸れて膿漏眼あるものを發し爲めに失明するに至ることあるが故に産婦の陰部より膿樣帶下あるを認むるときは微温百倍リゾール水又は五十倍石炭酸水を以て必ず膣内の洗滌を行ひ且つ此の如き分泌物ある婦人の産出したる小兒の眼は極めて清潔にし百倍の硝酸銀水を一滴づゝ點眼すべし然しながら此の點眼は通常醫師に托すべきものにして産婆は醫師の命に由てのみ之れをなすべし

兒の營養

小兒は分娩後凡そ十ヶ月位迄は前節に述べたるが如き授乳を

○授乳時間及ビ牛乳調製法ヲ問フ

廢すべき疾病なき限りは生母の乳汁に由て養育せらるべきものにして先づ分娩後六時間乃至八時間を經過し兒が睡眠の後目を醒し餓に泣くに至らば初めて乳を與ふべし而して乳を授くるには一定の習慣を付くること必要にして小兒の啼泣する毎に哺乳せしめ或は乳房を含ませながら小兒を睡眠せしむるが如きことあるべからず小兒の啼泣は必ずしも餓を訴ふるものにあらずして衣服の濕潤腹痛等身體の異和を感ずる度毎に啼泣するものあるが故に其の啼泣する度毎ごに乳を與ふるときは乳汁は未だ充分發育せざる胃中に充滿して嘔吐を發すに至るべく亦た睡眠中は消化器の作用止むものなれば胃及び腸内に滯溜する乳汁は此間に腐敗して消化不良を發するに至るべし故に晝間は健康なる小兒にありては三時間毎に虚弱なる

初生兒に授乳せしめつゝ睡眠する母は殺人犯をおかすに等し

小兒にては二時間毎ごに夜間は四時間乃至五時間毎ごに毎回凡そ二十分間位づゝ哺乳せしむるを良とす斯くせば小兒は終に能く習慣して異和を覺へざる限りは啼泣せざるに至るべし

授乳の際は先づ清潔なる布片に清水を浸して乳頭及び乳暈の部を能く拭ひたる後乳頭を小兒の口に含ましめ哺乳の間は手指を以て乳房を支へ小兒の鼻孔を閉塞せざる樣注意し母は授乳中決して睡眠すべからず然らざれば小兒は乳房の爲めに鼻孔を閉塞せられ窒息死に陷るこゝあり兒若し乳頭を含まざるときは指頭を以て小兒の下顎を靜かに下方に押し其口を開かしむべし而して乳房は常に左右交代に與へ一回の授乳に對しては一側の乳房を以て足るものとす

授乳の期間に於ては小兒の口中を清潔に保つこと必要にして

○乳母撰擇法の如何

○乳母ヲ撰擇スルニ當リテ注意スベキ件ヲ擧ゲ四

一日數回清水に浸して絞りたる布片を以て口内を清拭すべし

乳母の撰擇

生母の乳汁分泌僅少なるか或は他の原因によりて小兒に授乳し難き場合は適當の乳母を選びて之れを養育せしむべし此乳母の撰擇法は素より醫師に托すべきものにして外見上健康の婦人と雖ども潛伏せる病ある事多きが故に精密の撰擇は醫師に非ざれば到底あし能はざるものなり然れども産婆が豫め乳母の適否を察し然る後醫師の許に送る事を得ば甚だ便利あり今産婆の心得べき諸點を擧れば乳母は年齡二十歳乃至三十歳にして體格營養共によろしく梅毒結核、癲病、癇癇、脚氣等の疾病なく且つ慢性の皮膚病を患へず性質溫順にして秩序を

乳房大なりとて乳腺の發育之に伴ふものにあらず宜しく之を壓搾して乳汁噴出の模樣を檢すべし

守り分娩は數回を重ね其分娩したる小兒は其乳に由て良く成育し强壯なるもの又其乳房も能く發育し脂肪過多あらず鐘形をなし乳頭突出し之を壓搾する時は乳汁射出し其乳汁の一滴を手指の爪上に滴下して見るに永く滴狀を保つものを良とす而して乳母の分娩期日は生母の分娩時と等しきか或は二三週早きを良とす分娩後既に月經の來潮せる乳母は良しからず

乳母の攝生法、 乳母は生母に代て其小兒を養育するものなれば食物等も不消化物を攝らしめず脂肪少なき肉類風氣を釀さゞる野菜五穀類等を食せしめ平素習慣せる業務をとり新鮮の空氣中に於て適當の運動を營まし便通をよくし起臥飲食等規律を守る可きは授乳期中生母の攝生法に異なる事なし

○初生兒人工養育法ヲ記セ

兒の人工營養法

生母授乳する事能はざるか或は乳母を撰定する事能はざる時は已むを得ず他の方法により兒を營養せざるべからず是を人工營養法と云ふ然るに小兒の消化器は其の力不充分にして通常の食物を消化するの力なく齒牙もまだ發生せず固形物を咬斷する事能はざるが故に不適當の食物を與ふる時は忽ちにして病身ものたるは免がるべからず世間一般に小兒の死亡するもの多きは過半此營養法の不完全なるに基くものなり故に能く家人に諭して誤りなき樣注意せしむる事肝要なり

人工營養法に就て小兒に最も適當なるものは驢馬の乳、又は山羊の乳なりと雖ども是等は容易に得難きを以て通常牛乳を用ふ併し牛乳は人乳に比すれば幾分濃厚にして消化し難きが

一〇〇、〇の牛乳中に約二、〇の乳糖を加ふるをよろしとす

故に年齢に應じて適當に稀釋し糖分少あきが故に乳糖又は少量の砂糖を加へ且つ之れを煮沸消毒し時を定めて一定量づゝ規則正しく與ふべし

牛乳を稀釋するには其小兒の強壯なると虛弱なるとに由て異あれりと雖ども通常強壯なる小兒に在ては左の比例を以てするを良とす

一ヶ月以内	牛乳一分	水	三分
二ヶ月以内	同 一分	同	二分
三ヶ月乃至六ヶ月	同 一分	同	一分
七ヶ月以後	同 純粹		

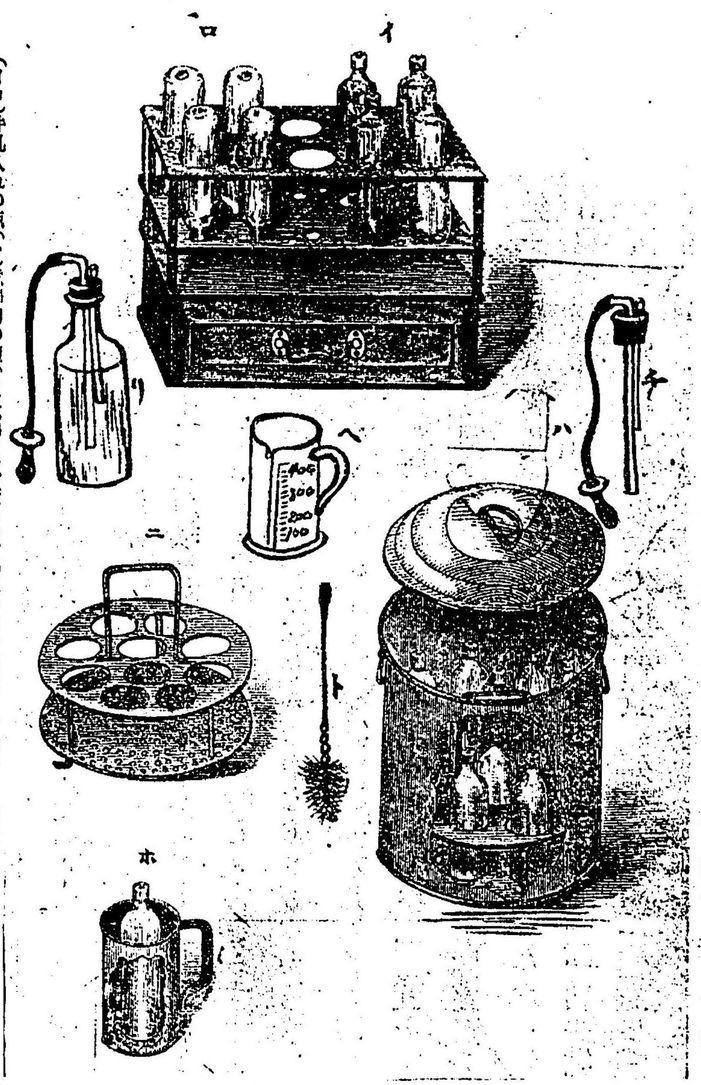
以上稀釋したる牛乳は各一回の授乳量を硝子瓶に入れ綿花を以て密栓し湯を盛りたる釜の中又は鍋の中に併列し沸騰せし

○牛乳ハ何故ニ煮沸スルヤ

むる事三十分乃至一時間にして取出し其儘冷却せしめ冷所に貯へ授乳せしむる際綿栓のまゝ適當の温度に温め與ふべし何となれば牛乳中には塵埃其他不潔物を混じ時としては結核其他の病毒を混ずる事ありて兒の體中に移行し大害をなす事あればなり故に又牛乳は常に新鮮なるものならざるべからず

牛乳を消毒するにソックレット氏牛乳消毒器を用ゐ得る時は甚だ便利なり該器は護謨製の蓋を有する百瓦乃至二百瓦を容るべき硝子瓶數個及び之を容れて煮沸すべき金屬製圓筒形の罐一個竝に之れに附屬する瓶架より成り其他牛乳及び水を量る爲め液量汁一個及び硝子瓶を掃淨する「ブラシ」一個牛乳を温むるに用ゆる鐵葉製小罐一個瓶を列べる瓶臺一個竝に護謨製の乳嘴數個を備ふるものにして之れを使用するには能く

第百四十一圖



ソックスレット氏の牛乳消毒器を示す

（イロ）牛乳入れの瓶（ハ）煮沸用の罐（ニ）煮沸用瓶架（ホ）牛乳温め用小罐（ヘ）牛乳測り用液量計（ト）瓶掃除用刷毛（チ）硝子管を具ふる乳嘴（リ）乳嘴を乳瓶に附したるもの

掃除して清潔にしたる硝子瓶中に適度に稀釋したる牛乳各一回量を盛り護謨蓋をなし瓶架の上に併列し之れを鑵中に入れ凡そ牛乳の高さに至るまで水を盛り蓋をなし之れを三十分乃至一時間火爐の上に於て煮沸し後ち鑵の蓋を去り硝子瓶を瓶架と共に取出し冷却する時は護謨蓋は外氣壓の爲に固く瓶の口に附着して之れを閉づるものとす

今之れを小兒に與へんとするには其消毒したる乳瓶を湯を盛りたる鐵葉製小鑵中に入れ殆んど體温と等しきに至るまで温めたる後ち蓋を去り少量の乳糖を加へ瓶口に乳嘴を附着して哺乳せしむ若し小兒の發育悪しきか或は適當の乳嘴なき時は消毒せる脱脂綿を小球となし綿紗に包み所謂乳豆となし之れを牛乳中に浸し其球部を小兒の口に含ましむべし而して小兒

○初生兒ノ授乳量及ビ授乳時間ヲ記セヨ

の飲み遺したる牛乳は再び用ゆべからず然れども煮沸のまゝ密閉し冷所に貯へたるものは一兩日間は懸念なく用ゆるを得べく授乳後の瓶並に乳嘴などは極めて清潔に掃除すべし

哺乳量は兒の健否年齢に由て差あること勿論にして一定の量を示す事能はざれども健康なる初生兒にありては分娩後初めの二三日に於て已に一回の哺乳量三十瓦を取り二十週間にして百五十瓦を哺乳すべし而して胃の發育につれ其量を增し第一週の終りに於ては一日の全量三百瓦三ヶ月の初めに於ては八百瓦七ヶ月に至れば千三百瓦を要するに至るべし

純良の牛乳を得難き場合或は夏あるにて牛乳の變敗し易き時に於ては止むを得ず「コンデンスミルク」を用ゆ其用法牛乳に同じく是れを稀釋するには凡そ左の比例に於てす而して「コンデスミルク」は大に糖分に富むを以て稀釋するも砂糖を加ゆるの必要なし本品は牛乳に比すれば消化器中に於て醱酵し易く從つて腸胃を害するを以て成るべく牛乳を用ひ萬止むを得ざる場合に於てのみ用ゆべし

「コンデンスミルク」の稀釋法

一週以内	「コンデンスミルク」一	水	二五
一週乃至二ヶ月	同 一	二三	
三ヶ月乃至六ヶ月	同 一	一八	
七ヶ月以後	同 一	一二	

小兒粉及び乳粉は六ヶ月以内の小兒には絶對的禁すべし

以上の外小兒粉或は乳粉等種々世間に用ひらるゝ營養品ありと雖ども品質善良ならず從つて小兒の消化器を害し易きを以て寧ろ廢棄するを良とす然れども萬止むを得ざる場合に於て之れを用ひんと欲せば醫師に乞ふて小兒の診察を受け且つ品

乳齒發生期の兒は消化不良を來し嘔吐下痢等の症狀を呈し唾液の分泌增し夜啼きをなす事多し

質の撰擇を受くべし何となれば小兒の年齡體質の强弱消化器の模樣により其品質を定むる事甚だ肝要なればなり

小兒生後七八ヶ月に至り乳齒の發生を初めば乳の傍ら牛乳粥汁半熟卵スープ等に少量の食鹽及び砂糖を加へたるものを一日二三回宛與へ之れに習慣せしむるを良とす然るときは再び母の姙娠せる時等に於て離乳するに甚だ便利なり

○離乳ノ時期ハ如何

離乳

離乳は土地人情により異なりと雖産後十ヶ月位に於てするを良とす卽ち此頃に至れば乳汁の分泌減じ小兒の齒牙は發生し能く柔軟なる(粥汁鷄卵の如き)食餌を攝り得るが故に漸次哺乳の度數を減じ十數日の後ちに至て全く離乳せしむべし而し

て授乳期中と雖母若し病に罹るか或は更に姙娠したるときは離乳せざるべからず若し離乳の季節夏期なるときは宜しく之れを延期すべし然らざれば下痢其他腸胃の疾病を起すの恐れあり

新撰産婆學　前編終

明治三十九年五月十五日印刷
明治三十九年五月二十日發行

正價金壹圓五拾錢

著作者　東條良太郎
著作者　土肥衛

印刷者　金子久太郎　神戸市兵庫湊町二丁目
發行者　緒方病院內產婆養成所　右代表者　信時義政　大阪市西區新町通三丁目
發賣所　輝文館植田書房　大阪市東區備後町四丁目
同　松村文海堂　大阪市南區心齋橋一丁目
同　丸善株式會社　大阪市東區博勞町四丁目　東京市日本橋區通三丁目
同　吐鳳堂　東京市本郷區龍岡町
同　若林書店　京都市寺町二條下ル
印刷所　金子印刷所　神戸市兵庫湊町二丁目

不許複製

25
25
25

059923-001-8

56-50

新撰産婆学

東条 良太郎
土肥 衛／著

前

M39

CBI-0181